



図 3 完成した熱い雪結晶を持つ子供たち

した。内容は、北海道の雪の研究にちなみ、中谷宇吉郎と雪まりもをテーマにしたものである。

科学クイズ大会の景品として、北海道教育大学の尾関俊浩氏による雪結晶の写真ポストカードを、会場内のスタンプラリーの景品として、成田英器氏による積雪の薄片ポストカードを提供した。

今回は限られた時間の中で、多くの子ども達に一斉に作業してもらう教室方式としたため、事前のリハーサルを入念に行った。その結果、参加者は小学校1年生～6年生まで幅広かったが、全員が時間内に、雪の結晶ができる過程を観察しながら、アイロンビーズの雪の結晶を完成させること



図 4 成田英器氏による写真と解説の付いた薄片ポストカード

ができた。

各回わずか1時間ほどのイベントではあったが、子供たちの笑顔は明るく、雪や氷に対する彼らの好奇心を育むことが出来たように思う。今後も雪氷学会支部会員による教育普及活動が継続されるよう希望する。

なお、今回の社会貢献事業を実施するにあたり、支部理事および支部会員の有志に協力していただいた。ここに感謝の意を表する。

(日本気象協会北海道支社 小松麻美 記)

(2011年8月10日受付)

北信越支部

「杣池高原 雪崩の森 公開見学会」報告

主催：アルプス雪崩研究所、共催：日本雪氷学会
北信越支部

2011年6月19日、梅雨の中休みに長野県小谷村杣池高原で標記見学会が行われた。参加者は計10名。そのほとんどは、前日の信州大学山岳科学総合研究所（松本）での公開講演会「雪崩を追って三十年」の参加者であった。

案内はアルプス雪崩研究所若林が担当した。ま

ず杣池高原のゴンドラリフト、スキー場施設が集中する「杣の森」（標高1500～1600m）で1996年2月の大雪崩が斜面に乗り上げて広葉樹をなぎ倒した跡を見る。さらに、ひよどり峰の山裾に展開するオオシラビソ巨樹林とミズバショウの湿原を歩く。針葉樹オオシラビソの巨樹といっても一様に地上4～5mで幹が2、3本に分岐した「フォークツリー」である。この樹林は過去に積雪深5m前後の時に大雪崩に襲われて雪面付近で折れた



図 1 榎の森フォークツリーを見学

が、下枝が雪中で生き残ったので、その後長い年月を掛けて新しい複数の幹を萌芽させ、異形の巨樹林に成長したもの。

次に別のロープウェイに乗り継いで残雪に覆われた標高 1900～2000 m の榎池自然園を歩く。山

上駅、山小屋等数々の施設はすべて、新旧の傷跡をもつオオシラビソのフォークツリーに囲まれており、固有名詞にはないものの、一帯はまさに「雪崩の森」あるいは雪崩を体に刻んだ森であって、森林は雪崩安全の象徴ではあり得ない。

午後はオプションで、7 人が白馬村の大雪溪に近い猿倉山荘と中山沢ヘリポート周辺の広葉樹林（標高約 1100 m）を見学する。一帯は小日向山（標高 1907 m）からの 2000 年 2 月災害雪崩をはじめ度重なる過去の雪崩によって傷ついてはいるが、ブナ、トチノキ、ホオノキがやはりフォークツリーの巨樹群として生き延びていた。また、カラマツの二股木も目についた。参加者は北アルプスの森林と山岳施設が置かれている厳しい現実、あらためて自然教育、防災教育の重要性をかみしめていた。

（アルプス雪崩研究所 若林隆三）

（2011 年 6 月 26 日受付）